

ハンガリー - ブラジル戦を観る

サッカーのハンガリー代表（フル代表）は、4月25日の日本戦の後、28日にブラジルのフル代表を迎えた。興味深いことに、ハンガリーのフル代表は1954年の初顔合わせからここまで、ブラジルに負けたことがない。3勝1分けなのだ。ただし、オリンピック代表は1勝1敗で、この1敗は日本とナイジェリアが加わったアトランタ五輪の予選グループでの敗戦だ。この時、日本はブラジルに勝利したが、カメルーンに負け、ハンガリーと引き分けたために、決勝トーナメントに進めなかった。この1996年の敗戦が、ハンガリーがフル代表と五輪代表を含め、代表ゲームでの唯一の負けなのだ。

ハンガリーのフル代表が最後にブラジルと闘ったのは、1986年3月。それから18年近い歳月の間に、ハンガリーサッカーは凋落の一途を辿った。この日の世界ランキングが1位のブラジルにたいして、ハンガリーは72位。これだけランキングの差があっても、サッカーのゲームはそれなりに成立するが、誰が考えてもハンガリーが勝てる要素は一つもなかった。

案の定、5万人で埋め尽くされたプシュカシユ・スタジアムは、ハンガリーの健闘を期待するというより、スター軍団見たさの物見ムード。ゲームが始まって、前半の半ばまで一進一退だったが、ブラジルが連続して得点してから、会場は完全にお祭り気分になってしまった。ゲームそっちのけで、会場はウェーブを繰り返す始末。ハンガリーが反攻する場面でも、ウェーブが止まない。ゲームと無関係に、観客はスター軍団を迎えたこの日を楽しんでいた。

前半終わりに3点目入った時には、もうゲームの興味が失われた。日本戦ではツートップだったが、ブラジル戦のFWは中国リーグにいるケネシェイのワントップ。全体が退き気味で、ボールを奪ってからの反攻が遅い。日本戦のように、前へ突進する選手がいらないから、前に配球できない。ブラジルのバックラインは高いから、バ

ックラインの裏に蹴りだし、そこに突進していけば良いのだが、前に走る選手がいらないから、ボールを奪っても、攻めが始まらない。ブラジルの攻撃テンポと雲泥の差があった。

圧巻は3点目の起点になったロベカル（ロベルト・カルロス）の動き。中央ライン手前でパスを出して、一挙に相手陣内のペナルティーエリアまで走り込み、手前で再度パスを受け、センターリング。これがファビアーノの3点目を生んだ。まるで絵に描いたような得点シーンだった。

ブラジルは4バック、ハンガリーは3バック。ジーコ監督が目指すブラジル型の4バック・システムは、攻めの時には2バック、守りに入った時には3バックあるいは4バックのように、柔軟に形を変えていく。このような伸縮自在のフォーメーションは、高い技術と状況判断に優れた選手を前提としている。

ヨーロッパの組織型サッカーは防御を基本としている。デフェンスラインを崩さないサッカーをやる。だから、双方とも同じような組織型チームの対戦の場合、膠着状態からの打開が難しい。ここにブラジル型のシステムが対抗できる理由がある。

南米型の自在な展開で相手のシステムを幻惑し、防御ラインが崩れた所へ個人技で割り込んでいく。これができれば、守りの堅い組織的サッカーの切り崩しが可能になる。日本がヨーロッパと同じ組織型のサッカーをやっても、W杯で16強の壁を破ることはできない。だから、南米型のシステムを導入するのが理に適っており、日本選手はそれに適応できるというのが、ジーコ監督の考えである。

中田、小野、稲本のように、複数のポジションをこなせる選手がもっと出てれば、ヨーロッパ型と南米型の日本的混合システムが機能するかもしれない。ジーコが欧州にいる選手に固執する理由だろう。三都主が日本のロベカルになる日が来るだろうか（2004年4月30日、T.M.）。